

仏教文化研究所と建学の精神

著者	木村 清孝
雑誌名	鶴見大学佛教文化研究所紀要
号	19
ページ	3-6
発行年	2014-03
URL	http://doi.org/10.24791/00000004



仏教文化研究所と建学の精神

鶴見大学仏教文化研究所所長 木村 清孝

御紹介をいただきました木村でございます。今日は、仏教文化研究所の所長という立場で、この研究所が本学の建学の精神とどのように関わり、その活動がどのように進められてきたかということについて、お話をさせていただきます。と思います。

この仏教文化研究所が設立されたのは、平成七年、一九九五年ですから、それ以来、もう十八年ほどになりますでしょうか。しかしながら、さまざまな事情から、長い間、専任のスタッフを置くことはできませんでした。やっと数年前に、池麗梅先生を専任研究員に迎えることが出来まして、本格的な活動が始まったと申し上げてよいかと思えます。

もちろん、それ以前から、基礎的な活動は着実に進められてきていました。けれども、専任研究員の採用は、一つの大きな節目でした。本研究所は、ここ数年で飛躍的に活発化してきましたのです。

研究所の目的としては、資料にございますように、鶴見大学の建学の精神に則り、日本における仏教文化研究の中心的な機関になるべく、規程には「広く仏教と文化に関する研究を推進し、学術の発展に寄与することを目的とする」と謳われております。

この建学の精神は、後に橋本先生から詳しいお話がございますが、光華女学校、次いで鶴見高等女学校の初代校長をお務めになった中根環堂先生が定められたもので、「大覚円成 報恩行持」という二句八字の熟語で示されています。大変高邁な仏教の実践的理想の宣揚であると申し上げてよろしいかと思えます。

しかし、それだけに、これを理解し味わい、身につけるのは、容易ではありません。そこで、私が学長として招かれたところから始まった、大学の全体的な再構築の議論の中で、この建学の精神をもっと分かりやすく、親しく、しっかりと受け止められるようなものに言い換えられないかということになりました。こうして生まれたのが、建学の精神の現代的な表記、「感謝を忘れず 真人となる」と「感謝のこころ 育んで いのち輝く 人となる」です。最終的には、大学の学生さんと附属中・高の生徒さんにお願ひして、アンケート調査を実施して決定しました。

なお、その中の「真人」は「ひと」と読んでいますが、漢語としては、臨済宗を開かれた臨済義玄禪師が唱えられた「無位の真人」が有名です。しかし、ここではその意味ではなく、中国でも日本でも用例がありますが、「真人の人」「まことの人」の意味です。なお、本のものと比較していえば、直接には、「感謝を忘れず」が「報恩行持」に、「真人となる」が「大覚円成」に対応しています。また、もう一つの方は、「感謝のこころ 育んで」が「報恩行持」に、「いのち輝く 人となる」が「大覚円成」に対応します。いずれにしても、本学の建学の精神には、感謝・報恩をベースにして、本当の人間になるということ、換言すれば、人のために、世のために、生きとし生けるもののためにとりう利他の道を基本とした人間形成を進めて、究極的には誰もが釈尊と同じく仏となることを目指すという願ひが込められているわけです。

道元禪師の教えの中に、「日日の行持、その報謝の正道なるべし。」というお言葉がございます。仏の道に則った私たちの毎日の生活そのものが、そのまま仏に報いるまことの道である、ということです。また、本研究所の母胎であるご本山のご開山瑩山禪師が残されたものを拝見いたしますと、仏、菩薩はもちろんですけれども、日本の神々や祖先に対して、さらには檀信徒に対しても、深く尊崇し、ご恩に報いるべきであるということが強調されています。これらから拝察いたしますと、要するに、仏道と正しい報恩・感謝の生活は、別ではなく、むしろ一つにならなければならぬ、ということでしょう。「報恩行持」には、こういう教えの伝統が受け継がれ、集約されているのです。

本研究所の具体的な活動としては、まず、地道な研究活動をまとめた『紀要』の刊行が着実に行われてきていることを挙げるべきでしょう。次いで、年一回の公開シンポジウムの開催があります。これら二つが、従来は大きな柱となっておりました。加えて、近年活発になってきたのは、研究所の所員がそれぞれの研究成果を発表する、研究例会の実施です。それから、国際的な学術交流も進展しつつあります。

さらに本学では、様々な宗教行事がございますが、これにも、色々な形で協力をしております。たとえば、昨年の御移転の記念行事のひとつとして立派な図録が刊行されましたが、それには所員の先生方のお力が大きかったです。

また、今後のことですが、本学の生涯学習センターの活動は、非常に高い評価を得ており、研究所もその一端を担っています。これについては、もっと身近な形で、地域の方々と接することができると、そういう方向でいっそう充実させていきたいと考えております。

また、ご本山との提携・協力関係に関しても、これまで以上に進める必要があるかと思えます。宗教と学術、宗門と大学とをどのような形で関連づけていくかということは、いわゆる「政教分離」の原則の運用上の問題もあつて、なかなかむずかしい問題です。しかし、出来るだけ両者の間の壁を低くするような方向で進めていくべきだろうと思えますし、実際にそういう動きも出てきています。

例えば、この前の東日本大震災の後、災害時における被災者のこころの問題の重要性が深く認識されるようになったのですが、その中で、神父さんでも牧師さんでもお坊さんでも宮司さんでもない、臨床宗教師という新しい職業人を養成することが、東北大学の鈴木岩弓先生を中心に具体化してきています。ともかく、宗教が関わっていつてはじめて、根底的なところでの癒し、心の安らぎというものが獲得されてきます。こういうことも、ご本山との協力関係の強化の中で進めていけるのではないかと思っています。

それから、仏教とその文化に関する学術情報についてですが、これはグローバルな広がりをもっています。出来れ

ばそれらを本研究所で集約し、また、信頼できる優れた情報を発信していきたい。いわば仏教学・仏教文化学の関する情報基地としての役割をいずれ果たせるようになればというのが、私の夢です。そして、同時に本研究所は、大学ないし学園全体のハートとして、活性化させる血液を送り出し、また再生させていく。要するに、学園の健康を維持する役割を果たせるように育てていきたい、ということです。

本日のシンポジウム全体に対する「序説」にあたる私の発表は、ここまでとさせていただきます。ご清聴、ありがとうございます。